

二種の生死について

兵 藤 一 夫

I

仏教は「輪廻(生死)」の苦しみからの解脱を目標としている。自らがその苦しみから解脱するとともに他の衆生をも解脱させることが求められている。その意味で、輪廻をどのように捉えるにしる、それは仏教において根本的な前提として考慮しなければならない。輪廻からの解放を獲得するためには、輪廻の仕組みを分析し、その原因を探求して、見いだされた原因を除去することが必要とされる^①。したがって、仏教では輪廻の仕組みについても伝統的に詳しい考察がなされているのである。

仏教における輪廻の捉え方は、全体としては基本的枠組みを守りながらも、仏教思想の展開につれて変更を余儀なくされているように思われる。特に、菩薩思想や大乘思想の展開は輪廻の捉え方に大きな影響を与えたように思われる。

ここでは、『勝鬘経』『成唯識論』などに説かれる二種の生死^②、「分段生死」と「不思議変易生死」、の意味を瑜伽行派の所説(特に『大乘莊嚴経論』)を通して検討することによって、仏教における輪廻(生死)の捉え方の変遷の一端を辿ってみたい。

II

まず、仏教における伝統的な輪廻思想(特に輪廻の仕組みと解脱)の一つの典型として、『俱舍論』のそれを見ておこう。

(1) 異熟(vipāka)ということ

仏教において輪廻の仕組みを考える場合、「異熟」という概念が重要である。

仏教では、輪廻における業の因果関係を異熟という概念で捉えているからである。異熟するのは業である。先に作られた業が後になって果として熟する。即ち、善業は楽を生み、不善（悪）業は苦を生む。そのように業が熟して果を生ずることを「異熟」というのである。アビダルマの発展につれ説一切有部（以下有部）では次のように異熟を定義する。

異なって熟することが異熟である。(AKBh, p. 89)

さらにまた、

異熟因は不善と善なる有漏〔法〕である。(AKBh, p. 89)

異熟〔果〕は無覆無記法である。(AKBh, p. 95)

したがって、有部の異熟に対する基本的な考え方は、不善法と有漏の善法と（即ち有記法）がそれとは別な自性である無覆無記（聖道を覆障せず、善でも不善でもない）法として熟することである。ところで、無記法と無漏法（道諦と三無為）とは異熟因にならない。即ち、無記法と無漏法によっては異熟果を生じないのである。その理由として、

〔無記法は〕腐敗した種子のごとく、力が弱いからである。……〔無漏法は〕水に潤されていない健全な種子のごとく、渴愛に潤されていないからである。(AKBh, p. 89)

また、異熟果とは、ある衆同分（人、犬、猫など）において命根と眼などの六根と女・男根とが異熟すること（即ち、ある衆同分において有情としての生を得ること）と、楽苦喜憂捨の受が生ずることである。換言すれば、有情としての生存の境涯が定められ、その境涯において楽苦などの受が生ずることである。このように生存の境涯が異熟果として定まることは、前世の業によって輪廻転生することでもある。

〔我とはただ五蘊にすぎないものである。……〕五蘊は刹那滅であるから余の境涯（趣）に転じる能力はない。しかし、煩惱と業によって熏じられると、中有とよばれる相続によって母の胎内に入る。たとえば、燈火は刹那滅であっても相続して別な場所へ移動のごとくである。(AKBh, p. 129)

(2) 輪廻からの解脱

輪廻から解脱するためには、一切の煩惱を断じなければならない。その手順を『俱舍論』第六章によって略説しておく^③。有部の修行体系は、順解脱分、順決択分、見道、修道、無学道と推移し、最終的に阿羅漢果を獲得することを目的とする。念住における四諦十六行相の観察によって見所断の煩惱を断じた者（見道の階位の者）は聖者と呼ばれ、修所断の煩惱を断じている程度によって預流、一來、不環とされる。これら聖者たちもまた、欲界に生まれかわる回数に違いはあるが、阿羅漢になるまでは輪廻転生する。そして、阿羅漢となって尽智、無生智を獲得して入滅する、すなわち、無余依涅槃を得ることによって完全に輪廻から解脱するのである。

(3) 『俱舍論』の中に見られる菩薩

『俱舍論』には菩薩について幾つかの言及が見られる。ここに説かれる菩薩たちは積尊など成仏することが定まっている特別な者のことで、大乘の菩薩思想と直接結びつかないとしても、当時の有部の者たちにとって菩薩という考え方が無視できない広がりを持っていたことを示唆しているであろう^④。

菩薩たちはどうして誓願を発して長時の苦勞をして菩提を正等覚するのか？ そんなことがあるであろうか？

菩薩たちは三無数劫にわたる福德と智恵の資糧によって、すなわち、多くの成し難い百千の行たる六波羅蜜多によって、大菩提を正等覚する。別な〔もっと容易な〕解脱の機会があるのに、彼らはどうしてそのような努力を企てるのか？

彼らは利他のためにそのような努力を企てるのである。「私はどのようにして他の者たちをも苦しみの瀑流から救うことができるであろうか」と。

その者たちには利他によってどんな自利があるのか？

利他そのものが彼らにとっての自利である。そ〔の利他〕が〔彼らの〕願望であるからである。〔願望は自利であると認められるからである。〕

〈中略〉 次のように言われている。

下の者（凡夫）はあらゆる手段でもって自らの相続に属する楽を求め
める。

中の者（声聞・独覚）は苦の滅だけを求め、楽を求めない。楽は苦
の住居であるからである。

上の者（菩薩）は自らの相続に属する苦〔行〕によって、他の者た
ちの楽と、他の者たちの苦の完全な滅を求める。彼は他の者の苦を
〔自らの〕苦とするからである。（*AKBh*, p. 182）

ここに説かれる菩薩は、成仏することが定まった者で、輪廻の仕組みの中
では特別な（上の）者と見做されている。菩薩が自らの善業を自らの楽とし
て受けず、利他行を完成するために、誓願によって長期間にわたって自ら苦
を受けていくこと（望んで悪趣に生まれることなど）^⑤は、無上菩提を獲得す
るためとはいえ、伝統的な輪廻における自業自得の原理を拒否することであ
る。

III

大乘仏教がどのようにして起こってきたかはさておき、自利・利他行を円
満して成仏することを目指す菩薩思想や、般若経などの主張する空の思想は、
輪廻に対する見方をも根本的に変換させるものであった。程度や視点の差は
あれ、実体的に捉えられた輪廻の鎖から解脱して涅槃に至るというあり方か
ら、輪廻を空と見ることに基づいて自利・利他行を円満していく「不住涅槃」
などの立場へと変化している。大乘の菩薩道が無上菩提を求め、成仏するた
めの道として確立するにつれ、菩薩の階位なども詳しく考えられるようにな
った。大きくは、仏陀と菩薩（無上菩提を求めて行をしている者）に分けら
れ、前者は輪廻を超え一切に対して自在の者、後者は輪廻に対して一切に対
して自在ではない者である。このことは、人格的なあり方としての仏陀であ
る変化身や受用身は輪廻転生を超えたものであり、他方、菩薩は輪廻という
あり方の中で存在する者、すなわち、輪廻転生する者であること、を意味す
る。しかし、菩薩が輪廻転生する者であるとしても、伝統的な輪廻転生（善

業楽果、悪業苦果としての自業自得)のあり方とは違ったものである。

結論的に言えば、無上菩提を求める菩薩の輪廻転生に関しては、三つの点が重要であると思われる。

- (i) 「誓願 (praṇidhāna)」によって自らの意志で新たな境涯に生まれる。
- (ii) 「廻向 (pariṇāmana)^⑥」によって自らの善業を業の因果関係を離れて別な目的 (自・他の覚り) のために振り向ける。
- (iii) 「一乗思想^⑦」の展開につれ、これまでは輪廻を解脱して完全な涅槃 (寂滅) に入っていたと考えられた声聞の阿羅漢と独覚は未だ無上菩提を得ていない者であり、修行途中の者 (菩薩) であると見做される。

この中、(i)と(ii)は前述のように、有部など大乘でない立場においても特別なあり方 (積尊の前世としての菩薩) として認められるものであるが、(iii)は大乘における一乗思想と密接に関係している。ここで取り上げる二種の生死の中、「不思議変易生死」は主として(iii)との関連の中で出てきたものであろうと思われる。

IV

そこでまず、瑜伽行派の所説、特に『大乘莊嚴經論』に基づきながら、一乗思想の中で「不思議変易生死」がどのように考えられているかを見ておこう。

(1) 瑜伽行派の一乗思想

瑜伽行派は五姓各別、三乗真実一乗方便の立場に立つことはよく知られている。衆生の種姓には、声聞、独覚、菩薩、不定、無姓の五つがあり、乗としては声聞、独覚、菩薩の三つがある。一乗が説かれるのは不定種姓の者を菩薩乗に導くことを意図してのことである^⑧。

『大乘莊嚴經論』第11章「述求品」には次のように説かれている。

不定なる者たちの中、一方の〔声聞乗に従事している〕者たちを引き寄せるために、そして他の〔菩薩乗に従事している〕者たちを摂持するために、仏陀たちによって一乗ということが説かれた。(XI-54)

不定の声聞〔種姓〕^④は、乗（諦）の義を見た者と見ていない者という点から、二種である。義を見た者はまた、離貪した者と離貪していない者とであり、その二人は鈍〔根〕である。(XI-55)

(MSA, p. 69)

〈安慧釈〉

不定の声聞種姓が大乗の門に入って正等覚者となるのは二種である。乗の義を見た者と乗の義を見ない者である。このうち、乗とは四諦である。四諦を見る者が乗の義を見る者と言われる。それは誰であるのか？ 預流と一來と不環の者である。乗の義を見ないものが四諦を見ない者と言われる。異生と信解行地の者である。乗の義を見た者にはまた二種がある。欲を離貪した者と未離貪の者である。その中、欲を離貪した者は欲界の欲と見・修所断の煩惱を残りなく断じた者であり、不環果の聖者たちである。欲の未離貪の者は欲界の見所断の煩惱は断じているが、修所断の煩惱は断じていない預流と〔一部しか断じていない〕一來の聖者たちである。離貪と未離貪両者とも鈍根であり、長い時間で涅槃を得ることになるので軟と言われる。(MSAV, Mi 220b-221a5)

また、彼ら二人は獲得した聖道を諸有に廻向すること (pariṇāmana) から、不可思議変易生 (acintyapariṇāmikī upapatti) と結び付く。

(XI-56)

〈世親釈〉

〔輪廻における〕生に対してその聖道が不可思議に変化する。それゆえ「不可思議変易」である。(MSA, p. 69)

〈安慧釈〉

これら聖者たちの生は不可思議であるといわれるのは、業と煩惱の力によって生はないが、聖道そのものが輪廻における生の因となるとき、彼らの生は「不可思議に変易する」という意味である。(MSAV, Mi 221b8-222a1)

一方の者は願の力により生を受ける。他方の者は不環たることを有

しているから、^⑩変化によって[生を]受ける。(XI-57) (MSA, p. 69)

〈安慧積〉

そのように欲を離貪した者としめない者との二人が輪廻に生じるのは不可思議変易の相であると説き終わって、今、欲を離貪していない者が有情利益のために輪廻にどのように生まれるかを説くために、「一方の者は……」と語る。「一方」という語は、欲を離貪していない者である預流と一來に対して言われる。彼らはどのようにして輪廻に生まれるのか？

願の力によって生まれるのである。即ち、三界の有情が苦しむのを見て、ある所で有情利益をしたいと望んで、見たままにそれらの者として生じようと願を立て、その願の力によってそこに生じる。生まれてから有情たちに対して、利益と楽をなす、即ち福德と智恵の資糧を積んで正等覚者となる、という意味である。

欲を離貪した者は輪廻にどのように生まれるかを説くために「他方の者は……」と語る。「他方」というのは、欲を離貪した者に対して言われる。彼らは自分自身では輪廻に生まれませんが、三昧を修して三昧の変化^⑪(力)によって変化して、その変化身が輪廻において生じて、有情利益を成就して、福德と智恵の資糧を積んで正等覚者となる、という意味である。(MSAV, Mi 222a1-a8)

ここにおいて不定声聞種姓だけ、しかも諦の義を見た者で、預流と一來と不環の者だけが論じられていることは注意すべきである。瑜伽行派の考えでは、三乗はそれぞれに確定しているので、それぞれの乗で最終的な果を得た者には変更はあり得ない。声聞乗によって阿羅漢果を得て既に完全な寂滅(無余依涅槃)に入っている者は変わり得ないのである。したがって、不定種姓とは未だ最終的な果を得ていない者でも^⑫ある。また、諦の義を見ていない者、すなわち、見道に達していない凡夫にとっては、三乗の区別はそれほど重要なものとはならない。そのため、ここでは預流と一來と不環の者だけが論じられているのである。

不定声聞種姓の聖者は、有情利益(菩薩道)のために、既得の聖道を輪廻

の生（諸有）に廻向すること（pariṇāmana）によって望んだままに不可思議に変化した（acintyapariṇāmiki）生を受けることができる。これが「不可思議変易生（acintyapariṇāmiki upapatti）」である^⑬。これには二種の仕方がある。欲界の修惑を離貪していない者（預流、一來）は願の力によって輪廻に生を受け、欲界の修惑を離貪している者（不環）は変化身として輪廻に生じる。この場合、彼らが輪廻に生を受けるのは有情利益のためであるから欲界に生まれることが必要である。預流と一來の者は欲界の修惑を断じていないため欲界（善趣）に生じるのであるが、業報の法則のままでは悪趣には生じない。そのため誓願の力によって業報の法則の一部を打破して悪趣にも生まれようとするのである。一方、不環の者は欲界の修惑を断じているのでもはや欲界に生まれることはない。したがって、欲界における依身そのものを業報の法則に依らずに作り出さなくてはならない。預流の者などとは別な仕方が必要とされるのである。それが三昧の力による変化身である。

しかし、いずれにしても、ここに説かれる「不可思議変易生」を受ける者たちは、聖者であるにしても、輪廻を完全に解脱し無余依涅槃に入った阿羅漢ではなく、輪廻転生の枠内にある者たちであることは注意しておかなければならない。

V

二種の生死、「分段生死」と「不思議変易生死」が揃った形で詳しく説かれるのは、『勝鬘經』においてである^⑭。そこでもやはり、一乗思想との関わりの中で二種の生死が言及されている。『勝鬘經』第五「一乗章」では、勝鬘夫人によって次のように語られる。

「世尊よ、〔阿羅漢と独覚たちが〕般涅槃するというこのことは如来の方便です。それはなぜかと言えば、世尊よ、如来・応供・正等覚者たちは般涅槃を得ているので一切の功徳を備えているが、阿羅漢と独覚たちは一切の功徳を備えていないからです」〈中略〉

「世尊よ、〔阿羅漢と独覚たちが〕般涅槃するというこのことは如来の方

便です。それはなぜかと言えば、世尊よ、如来・応供・正等覺者たちは般涅槃を得ているので、一切の断ずべき障害を断じて完全な清浄を備えているが、阿羅漢と獨覺たちは障害の残りを持っており完全な清浄法を備えていないからです」〈中略〉

「世尊よ、阿羅漢と獨覺たちの解脱に対する自内証智の究竟である四念^⑮というものもまた密意あるものであり、残りあるものであり、未了義であり、区別され説明されるべきものです。それはなぜかと言えば、世尊よ、死はこれ二種^⑯です。二とは何かと言えば、分段死 (rgyun chad pa'i 'chi 'pho, parichinnā cyuti) と不思議變易死 (yongs su bsngos pa bsam gyis mi khyab pa'i 'chi 'pho, acintyapāriṇāmiki cyuti) ^⑰です。世尊よ、その中、分段死とは結生相続を有した有情たちのものです。不思議變易死とは阿羅漢と獨覺たちと、力を得た意生身の菩薩大士たち、即ち、菩提の心髓に究竟するまでの者たちのものです。世尊よ、これら二種の死の中で、分段死に関して“私の生は尽きた(我生已尽)”という阿羅漢と獨覺たちの智が生じます。同様に、[すべきことが]残っている果を現証したことに依拠して、“私は梵行をなした(梵行已立)”という阿羅漢と獨覺たちの智が生じます。凡夫である天と人のなすべきことを有したすべての者と七種の学人たちは、結生相続をもたらず諸煩惱を断ずるという以前になされなかったそのことをなしたことに依拠して、“なすべきことはなされた(所作已弁)”という阿羅漢と獨覺たちの智が生じます。世尊よ、後有を受けないということは、阿羅漢によって断じられるべき諸煩惱と再び有として結生することに関して、“後有を受けず(不受後有)”という阿羅漢と獨覺たちの智が生じます」

「世尊よ、“後有を受けず”というこの智はまた、一切の煩惱を断じたのでもなく、一切の生を遍智しているのでもありません。それはなぜかと言えば、世尊よ、阿羅漢と獨覺たちにはまた、諸煩惱を断じていないことと生の煩惱を遍智していないことがあるからです。世尊よ、煩惱は二種です。住地煩惱と起煩惱とです。住地煩惱はまた四種です。四とは

何であるかと言え、即ち、見一処住地と欲愛住地と色愛住地と有愛住地です。これら四種の住地によって一切の起煩惱が生ずるのです。世尊よ、これら〔起煩惱〕は刹那的なものであって、心刹那と相応するものです。最初の時以来の無明住智は心不相応です。これら四つの住地の中で大きな力あるものでも、一切の随煩惱の根本原因となる無明住地の大きな力に対して、数として、部分として、数えるものとして、喩えとして、あるいは因として耐えられません。世尊よ、そのように無明住地は大きな力であり、有愛住地と呼ばれるとしても、これら四つの住地を凌ぐものです」〈中略〉

「世尊よ、例えば、取の縁によって有漏の業の因から三有が生じるように、無明住地の縁によって無漏の業の因から阿羅漢と独覺たちと大力の菩薩たちの三つの意生身が生じます。世尊よ、無明住地は、これら三地におけるこれら三つの意生身が生じることと無漏の業をなすことの所依です。そのごとくであるから、無明住地は三つの意生身と無漏の業の縁であるため、有愛住地と同じ名前です。そのごとくであっても、有愛住地と共通の業ではありません。無明住地は四つの住地とは全く別であって、完全な解脱と仏地によって断ぜられるべきものであり、如来の覚りの智によって滅せられるべきものです」

「それはなぜかと言え、世尊よ、阿羅漢と独覺たちによって四つの住地は断ぜられても、漏が尽きることに對して自在力を得ず、現証もし得ないからです。漏が尽きるということは、無明住地の〔尽きる〕ことを言っています。そのごとくであるから、阿羅漢と独覺たちと最後有の菩薩たちはまた、無明住地によって覆障され、覆われて、見えなくされることによってあれこれの法を知らず、証得しません。あれこれの法を知らず見ないことによって、断ぜられるべきあれこれの法を断ぜず行じません。断ぜられるべきこれらの法を断ぜず行ずべきことを行じないので、彼らは残余のある障害からの解脱であり、一切の障害からの解脱ではありません。世尊よ、彼らは残余のある清浄法を備えた者であるが、一切

清浄法を備えた者ではありません。彼らは残余のある功徳を備えた者であるが、一切の功徳を備えた者ではありません。(北京 No. 670-48, 269a3-272a2; 大正12, 219c-220b, 675b-675c)

ここには一乗思想、すなわち、阿羅漢も独覚も含めて一切の者たちは成仏すべきであるということ、の中でこれまでの阿羅漢や独覚たちの「涅槃」が再検討されている。阿羅漢や独覚たちが涅槃したと言われるのは如来の方便であり、実際には涅槃しておらず生死の中にあると考えるのである。(真に般涅槃するのは如来だけである)しかし、生死の中にあるとしても、凡夫たちと同様な生死ではないはずである。そこで、凡夫たちとは別な生死、有漏の業を断じているので従来の業報の法則に基づく生死ではないが、業報の法則という枠の中での新たな生死、すなわち、無明住地(仏地においてしか完全に断ずることができない微細な無明)によって起こされる無漏の業による生死が導入されたのである。ここでは、前者が「分段死」、後者が「不思議変易死」と言われる。どちらも三界の中での生死であるが、その仕組みは異なっている^⑩。

「分段死」とは、先に紹介した『俱舍論』などに説かれる伝統的な生死を表現したものである。一方、「不思議変易死」とは、『俱舍論』などでは異熟果を引かないとされていた無漏の業による異熟果とされるが、「不思議変易」という語そのものは説明されていない。この異熟果として生じる身は「意生身」と呼ばれ、意のままに願いのままに三界のいずれかに生じることができるものである。ここに、生死に対する新たな考え方が取り入れられている。ただ、ここに説かれる「不思議変易死」は、無明住地によって起こされる無漏業という特別なものが新たに持ち込まれているとしても、あくまでもそれは業であって、業によって引き起こされるという「業報の法則」は守られていることは注意しておくべきである。

前述の『大乘莊嚴經論』のそれと比較するといくつかの点で注意を引く。

(i) 「不思議変易生死」の対象となる者が異なっている。『大乘莊嚴經論』では阿羅漢に達するまでの不定声聞種姓の聖者(預流、一來、不環)であり、

阿羅漢は完全な寂滅に入った者として対象から除外されていたが、『勝鬘經』では『大乘莊嚴經論』で除外されていた阿羅漢〔や独覺〕こそがまさにその対象とされるのである。これは一乗に対する両文献の立場の違いに起因するものであろう。いわゆる、前者は三乗真実一乗方便の立場、後者は三乗方便一乗真実の立場である^④。

(ii) 「不思議変易生死」の起こる仕組みが異なっている。『大乘莊嚴經論』では「廻向」「誓願」あるいは「三昧の神通による変化身」によって輪廻の枠内で従来の業報の法則を打破するが、『勝鬘經』では「無明住地」という新たな微細な無明と無漏の業による特別な業報を導入することによって従来の業報の法則を打破する。前者は菩薩が「誓願」や「廻向」によって従来の業報の法則を打破するという考え方と同じであるが、後者は少し異なった視点を取り入れられている^⑤。

VI

最後に、『成唯識論』に説かれる「二種の生死」を見ておく。『成唯識論』では、一乗思想を論ずる中ではなく、唯識の立場で有情の生死相続を論ずる中でこれが言及される。したがって、有情の生死のあり方として「二種の生死」が取り上げられる。

また次に生死の相続することは、内の因と縁とによりてなり。外縁を待たず。故に唯識のみあり。因とは謂わく、有漏と無漏の二の業なり。生死を感ず。故に説きて因と為す。縁とは謂わく、煩惱と所知との二障なり。助けて生死を感ず。故に説きて縁と為す。所以は何ぞ。生死に二あり。一には分段生死にて、謂わく、諸の有漏の善と不善との業が煩惱障の縁の助くる勢力によりて感ずるところの三界の籠なる異熟果なり。身と命とに短と長とあり。因と縁との力にしたがって定まれる斉限あり。故に「分段」と名づく。二には不思議変易生死にて、謂わく、諸の無漏の有分別の業が所知障の縁の助くる勢力によりて感ずるところの殊勝の細なる異熟果なり。悲と願との力によりて身命を改転して定まれる斉限

なし。故に「変易」と名づく。無漏の定と願とに正しく資感せられて妙用測り難きを「不思議」と名づく。

あるいは意成身と名づく。意願に随^㉒って成ぜらるるが故なり。契経に説くが如し。

取を縁となし、有漏の業を因として後有を續くものの三有に生ずるが如く、是の如く無明住地を縁となし、無漏の業を因として、阿羅漢と独覺とすでに自在を得たる菩薩との三種の意成身を生ずあり。又は變化身と名づく。無漏の定力をもつて本に異にあらしむること變化の如くあるがゆえに。ある論に説くが如し。

声聞の無學は永に後有を尽くせり。云何ぞよく無上菩提を証するや。變化身によりて無上覺を証す。業報身にはあらず。

故に理に違わず。

もし所知障は無漏の業を助けてよく生死を感ずといわば、二乗の定〔種〕姓はまさに永に無余依涅槃に入らざるべし。諸々の異生の煩惱に拘わることとなるがゆえに。如何ぞ道諦の実によく苦を感ずるや。

誰が言う、実に感ずと。

しからざれば、如何。

無漏の定と願とが有漏の業を資けて所得の果を相續して長時に展転して増勝せしむるを仮説して感と名づく。是の如く感ずるときには、所知障が縁となりて助くる力による。独りよく感ずるにはあらず。しかるに、所知障は解脱を障せず。よく業を發して生を潤す用なきが故に。

資けて生死の苦を感ずることを用ることは何のためぞ。

自ら菩提を証し他を利益せんとのためなり。不定〔種〕姓の独覺と声聞とおよび自在を得たる大願の菩薩とはすでに永に煩惱障を断伏するがゆえに、また当の分段身を受くべきことなし。長時に菩薩の行を修することを廢するを恐れて、遂に無漏の勝れたる定と願との力をもつて延寿の法のごとく現身の因を資けて彼を長時に与果して絶えざらしむ。數々に是の如く定と願とをもつて資助することすなわち無上菩提を証得する

に至る。(『新導本成唯識論』卷八, pp. 23-24)

ここに説かれる二種の生死は、基本的な仕組みとしては先の『勝鬘經』のものと同じである。すなわち、「不思議変易生死」は「悲と願の力によりて」と述べられてはいるが、基本は「無漏の有分別^⑤の業が所知障の縁によって感ずる異熟果」ということにある。所知障とは無明住地のことである。この「不思議変易生死」はまた、「意成身」あるいは「変化身」として輪廻に生じることでもある。そして、この生死の対象となる者は不定の種姓の声聞と独覚と自在を得た大願の菩薩とされている^⑦。ただ、ここで声聞と独覚に対して「不定の種姓の」と限定をすることが『勝鬘經』との大きな違いであって、この限定によって瑜伽行派の一乗思想が明確に示されているのである。

最後に、二障（煩惱障、所知障）説との関連について少し言及しておきたい。瑜伽行派では、人無我と法無我によって断じられるべきものとして煩惱障と所知障の二障^⑧を考える。そして声聞・独覚の二乗は人無我によって煩惱障だけを断じるとする。また、菩薩は初地において人法二無我に通達するが未だ所知障を完全に断ずることはできず、第二地から十地にかけてその所知障を完全に断じて仏地に至る。したがって、初地以降の菩薩は所知障を残しながら有分別の智（後得清浄世間智）によって利他行を起す。これは、業としては無漏であり伝統的な立場では異熟しないのであるが、所知障を助縁として細の異熟が起こる。即ち意成身が生じると考えるのである。そして、この所知障は『勝鬘經』などに説かれる無明住地（無上菩提を獲得するまで断ずることができない微細で執拗な無明）に相当するものと見做されている。

略号

AKBh : *Abhidharmakośabhāṣya* ed. by Pradhan (1967)

MSA: *Mahāyānasūtrālamkāra* ed. by S. Lévi (1907)

MSAV: *Mahāyānasūtrālamkāravṛtti*, 北京 No. 5531

註

- ① 支分縁起はその一つの表現であるとも考えられる。即ち、輪廻の苦である老死の原因を探求していく中で、その根本原因が渴愛（六支）、あるいは識（十支）、あるいは無明（十二支）であるとされるのである。
- ② ほかに『楞伽經』などにもこの二種の生死が説かれる。注④参照。

- ③ 拙論「四善根について—有部に於けるもの—」(『印度学仏教学研究』No. 38-2, 1990) 参照。
- ④ 『俱舍論』においても菩薩のことが言及されていることから、この広がりには『俱舍論』よりもかなり前から見られるようである。
- ⑤ 『俱舍論』第六章には、三種姓(声聞・独覚・菩薩)間の転換に関して、四善根の忍位以上は悪趣に墮さないとされるので、忍を得た後は声聞から菩薩への転換はあり得ないことを述べる。

すでに生じた煖と頂〔の善根〕を声聞種姓から転じて仏陀となることはあり得る。しかし、忍が得られた時には〔そのことは〕決してあり得ない。どうしてか?〔忍は〕悪趣を離れているからである。菩薩たちは利他行に従がうことから悪趣にさえも飛び込むと言われている。その同じ〔声聞の〕種姓が転じ得ないから〔成仏は〕あり得ない。(AKBh, p. 348)

- ⑥ 廻向に関しては、梶山雄一「般若思想の生成」(『講座大乘仏教』2 般若思想所収, pp. 64-79) 参照。そこでの所説を筆者の責において要約する。

廻向の論理は業報説そのものの中に内在している。業はかならず果報が量的に対応するという「物理的必然性」とその果報は他人に譲渡不可能であるという「自己責任性」を有する。業に関するこの二つの鉄則は互いに矛盾するが、この矛盾こそが廻向を可能ならしめる論理である。一方で、この業の法則を打破すべき社会的要請が生じてくる。仏教の内部で言えば、「サンガへの布施」「餓鬼への布施」「神通による留多寿行、捨多寿行」などである。廻向には二義がある。「熟変させること」と「ふり向けること」とであり、それぞれは「内容転換の廻向」と「方向転換の廻向」とも考えられる。しかしこれら二つは同一の本質を共有するという面を持っている。布施を贈る相手であるサンガ、阿羅漢などは「田(福田)」である。布施者は「農民」である。布施されるものは「種子」である。布施を向けられた餓鬼などはその「果」を享受し、布施者は功德を得て天界に至る。

また、『解深密経』には、「廻向とは、これらの波羅蜜を實踐して集めて無上菩提の果を願うことである」(北京 No. 774, Nu 48a8-48b1; 大正 16, p. 705a) と述べられている。

- ⑦ 一乗思想についてはこれまで多くの研究がなされているが、最近の主なものを列挙しておく。
- (1) 長尾雅人「一乗・三乗の論議をめぐって」(長尾雅人『中観と唯識』所収, 1978)
 - (2) 松本史郎(1982a)「Madhyamakāloka の一乗思想——一乗思想の研究(1)——」(『曹洞宗研究員研究生研究紀要』No. 14, 1982)
 - (3) 同(1982b)「唯識派の一乗思想について——一乗思想の研究(2)——」(『駒沢大学仏教学部論集』No. 13, 1982)
 - (4) 同(1983)「『勝鬘経』の一乗思想について——一乗思想の研究(3)——」(『駒沢大学仏教学部研究紀要』No. 41, 1983)

(5) 白館戒雲 (1993) 「一乗思想と如来藏思想について」(『東西学術研究所紀要』 No. 26, 1993)

⑧ 『解深密経』に説かれる一乗思想は少し趣が異なる。

世尊よ、世尊は声聞乘なるものと大乘なるものそれは一乗であると説かれましたが、その際の密意は何ですか？

観自在菩薩よ、私は声聞乘において種々の法の自性、すなわち、五蘊、六内処、六外処などを説いたが、その同じものを私は大乘において同一の法界・方軌として説いたので、それゆえ、私は別な乗としては語らない。その際に、意味に関して言葉そのままに分別して、ある者は増益し、ある者は損減して、別な乗であるとして分別をなし、それら二つは等しくないと思って相互に争いをしているのである。その際の密意は以上のことである。(北京 No. 774, 53a1-4; 大正16, p. 708a)

⑨ 不定声聞種姓とは、五姓の中の不定種姓に含まれる者で、現に声聞乘に従事して預流、一來、不環の聖者となっている者もいるが、声聞乘の究極的な覺り(阿羅漢としての無余依涅槃)を得ることなく菩薩乘に転向する者である。袴谷憲昭・荒井裕明『大乘莊嚴經論』(新国訳大藏經、瑜伽・唯識部12) p. 121 注⑨参照。

『解深密経』などでは、声聞が二種に分けられている。一向趣寂靜声聞と廻向菩提声聞である。松本史郎(1982b)も指摘するように、不定声聞種姓は廻向菩提声聞に相当するであろう。『解深密経』には、

一切の仏が企てたとしても、一向趣寂靜の声聞種姓を有する人を菩提の心髄に立たせて、無上菩提を得させることはできないであろう。それはどうしてか？ なぜなら、彼は慈悲が極めて少なく、苦を非常に恐れるから、本性としてまさに種姓が劣った者であるからである。彼は慈悲が極めて少ないとされたとおり、有情利益をなすことに全く背を向けるであろう。苦を非常に恐れるとされたとおり、一切の行を造作することに全く背を向けるであろう。有情利益をなすことに全く背を向けることと一切の行を造作することに全く背を向けることが無上菩提であるとは、私は説かない。それゆえ、一向趣寂靜 (zhi ba'i bgrod pa gcig pu pa) と言われる。廻向菩提声聞 (nyan thos byang chub tu yongs su 'gyur ba) を私は、異門として、菩薩であると説く。なぜなら、彼は煩惱障から解脱した後、如来たちによって促される時、所知障から心を解脱させるからである。彼は最初に自利における加行のあり方で煩惱障から解脱する。それゆえ、如来は彼を声聞種姓と呼ぶのである。(北京 No. 774, 21a7-21b 5; 大正16, p. 695a-b)

また、『瑜伽論』「撰決択分」には、「廻向菩提声聞は無余依涅槃界に住して無上菩提を達成するのか、あるいは有余依涅槃界に住してであるのか？ ただ有余依涅槃界に住してである。なぜなら、無余依涅槃界に住している者は、一切の行から離れ、あらゆる努力が断たれているからである」(大正30, p. 749) と述べられている。注⑩参照。また、『顯揚聖教論』に関しては注⑪参照。

⑩ “anāgamitāyogāt” のチベット訳は “phyir mi 'ong ba dang ldan phyir”

(本偈、世親釈)と“phyir mi 'ong ba ni rnal 'byor gyi ni” (安慧釈) というように解釈が異っているが、ここでは前者を採用する。

- ⑪ ここでいう輪廻とは、有情利益の場となるものであることから、主に欲界が想定されているであろう。ところが、不環の者は業の法則のままではもはや欲界に生まれることはないのである。また、ここでの変化身は仏の三身の一つのそれとは別なものである。ところで、後述するように、『成唯識論』(巻八)では、声聞の無学が変化身によって無上菩提を獲得することを述べる。
- ⑫ 阿羅漢(無学)の中でも、有余依涅槃の者たちの一部は廻向菩提声聞であり、厳密に考えれば、ここでの不定声聞種姓に含めてもよいであろう。注⑨参照。
- ⑬ 松本史郎(1982b)注⑩に述べるように、「不思議変易(acintyaparīṇāmikī)」と「廻向菩提(byang chub tu yongs su 'yur ba, bodhiparīṇāmika)」は関連のある語であろうが、不思議(acintya)が菩提(bodhi)を意味するのではないであろう。「不思議変易」は既得の聖道を輪廻における生に廻向することにより輪廻の原則から見では不思議な生を得ること、即ち聖道が不思議に変化して輪廻における生の因となることを意味する。「廻向菩提」は既得の聖道を無上菩提に廻向することであり、そのことは必然的に利他行を円満するために輪廻における生を願うことになる。pari√nam は「変化する」「振り向ける」の意味である。
- ⑭ 既に指損されているように、二種の生死は『楞伽經』や『宝性論』にも説かれる。舟橋尚哉(1980)「唯識思想における生死について—原始仏教より唯識まで—」(『日本仏教学会年報』No. 46, 1980)参照。また、『顯識論』(大正 31, 880b)にもこの二種は見られる。注⑩参照。また、『仏性論』(大正 31, 799a)には、声聞・独覚・大力菩薩に関して無明住地と意生身との関わりの中で「方便生死」「因縁生死」「有有生死」「無有生死」の区別も見られる。
- ⑮ すぐ後に説かれる「我生已尽」「梵行已立」「所作已弁」「不受後有」の四つである。
- ⑯ ここには「死(cyuti, 'chi 'pho)」という語が用いられているが、死のみを意味しているのではなく、文脈上「生死」を意味している。
- ⑰ Skt の形は『宝性論』に基づく。
- ⑱ 後に説かれるように、無明住地が有愛住地と呼ばれるとしても、四種住地の最後のものとしての有愛住地と全く同じものではない。無明住地が意生身という形にしる三界の有を生じさせる縁となっていることから「有愛住地」と名付けたものと思われる。漢訳(求那跋羅, 菩提流志訳)には、無明住地が有愛住地とも呼ばれるとは語られていない。そこでは、無明住地は四つの住地に於て最も力あるもので、それら無数の煩惱の所依となりそれら煩惱を長く住させるものであって、四つの住地とは別なものとして考えられている。注⑩参照。
- ⑲ 求那跋羅訳によれば、「世尊、また取が縁となり有漏の業が因となりて三有を生ずる如く、是の如く、無明住地が縁となり無漏の業が因となりて阿羅漢辟支仏大力菩薩の三種の意生身を生ず。此三地において彼の三種の意生身の生ずることおよび無漏の業の生ずることは無明住地に依り、縁有りて無縁に非ず。是故に、

三種の意生〔身〕および無漏の業は無明住地を縁とす。世尊、是くの如く、有愛住地を数として四住地は無明住地の業と同じからず。無明住地は四住地と異離し、仏地の断ずるところなり。仏の菩提智の断ずるところなり」(大正 12, 220a)。また、善接流志訳(大正 11, 675c)もほぼ同様である。聖徳太子の『勝鬘經義疏』では、下線部は次のように注釈されている。「此三地とは此三界地なり。彼の三種とは彼の三乘人なり。意生とは変易生なり。身生とは分段生なり。および無漏の業生とは即ち謂う、業生なり」(大正 11b) これによれば、チベット訳とは解釈が異なるようである。

- ⑳ 鶴見良道(1975)「勝鬘經における二種生死義」(『駒沢大学大学院仏教学研究会年報』No. 9, 1975)と渡辺隆生(1980)「唯識説における惑障の生起一とくに「成唯識論」を中心として一」(『日本仏教学会年報』No. 46, 1980)には、分段生死が三界内の生死、不思議変易生死が三界外の生死と述べられている。しかし、この三界の内外という言い方は正確ではないであろう。阿羅漢や独覚たち乃至最後身の菩薩たちは利他行のために三界に生死し、そこにおいて行ずることによって無明住地を断ずるからである。『顯識論』に「分段是三界。變易是界外」(大正31, 880b)とあるが、これは従来の三界生死の立場(業報の法則)からの説明であり、変易生死はその原則を越えることを示しているのである。『勝鬘經』には「無明住地は、これら三地におけるこれら三つの意生身が生じ無漏の業をなす所依である」と説かれ、意生身が三界において生じること示している。
- ㉑ 松本史郎(1983)は、『勝鬘經』の一乗思想は唯識派の三乘真實説の典拠にされていることから、そのような典拠ともなりえるような要素が存在していた、と述べる。しかし、声聞の阿羅漢や独覚が特に有余依涅槃や不定種姓などと限定されず、その者たちが無上菩提を得るために意生身によって有情利益をするように説いていることから、唯識派の三乘真實説とは明らかに異なっているであろう。もちろん、その阿羅漢や独覚たちに限定を加えれば、唯識派の典拠として使うことは可能である。実際、後に紹介するように『成唯識論』にも典拠として引用されている。注㉒参照。
- ㉒ 前述の『俱舍論』の菩薩の例や『大乘莊嚴經論』の「不思議變易生」では、「誓願」や「廻向」によって同じ事柄が説明されている。ここでも、「意生身」ということで「願いのままに」三界に生まれることが示唆されているが、従来の業報の法則を越えることの説明としては直接に「誓願」や「廻向」は用いられていない。
- ㉓ 『勝鬘經』に説かれる「意生身」と同じであって、意のままに、願いのままに三界に生じる身のことである。
- ㉔ 新導本によれば、『勝鬘經』(大正 12, 220a)である。先に引用した『勝鬘經』の部分参照のこと。
- ㉕ 新導本によれば、『顯揚聖教論』(大正 31, 560a)である。
声聞の転依はまさにまた二種有ると知るべし。一には趣寂滅。二には趣菩提なり。問う。声聞の無学は永えに業を尽くせり。如何がよく阿耨多羅三藐三菩提

を証するや。答う。變化身に住するによりてよく菩提を証す。業報身にはあらず。また、声聞の転依は流転に背くことをもって修するが故に得る。菩薩の転依は方便をもつて修することおよび無二智を依止となすが故に得る。

ここに説かれる「趣寂滅」と「趣菩提」は、それぞれ『解深密經』などに説かれる「一向趣寂靜」と「廻向菩提」に相應するものであろう。

- ⑳ 後得清淨世間智のことである。
- ㉑ 『顯揚聖教論』を引いて「声聞の無学」という言い方も見られることから、ここでの声聞は不定種姓の阿羅漢も含んでいると思われる。注⑨⑩参照。
- ㉒ 瑜伽行派の二無我や二障については、早島理(1985)「人法二無我論—瑜伽行唯識学派における—」(『南都仏教』No. 1985)を参照。